

グローバルな認識とローカルな実践

—フランスの日本語教育の視点から—

大 島 弘 子*

1. はじめに

グローバルな考え方が基本理念として整合性のあるものであっても、それをローカルな場面に適用しようとするとき色んな軋轢が生じ、その折り合いをどうつけるかということが問題になる、というようなことは、色んな分野に共通した現象だと思われるが、本稿では、フランスの日本語教育という視点からの分析を試みたい。具体的には、2021年を目指し今現在進んでいるバカロレア改定を取り上げ、その中で、外国語教育の基本理念となっているグローバルな考え方を概観し、この改定により高校の日本語教育がどのような影響を受けるのかというローカルな問題を考察する。

2. バカロレア

バカロレアとは、フランスの中等教育終了試験であると同時に、大学進学資格試験でもある国家試験である。現行の一般バカロレア¹は、科学系（S）、経済・社会系（ES）、文学系（L）の3系統に分かれている。2019年度のバカロレアの全体合格率は88.1%、一般バカロレアに絞ると91.2%である。高校2年時に前もって受けるフランス語の試験を除くすべての科目の試験は、高校3年時の6月に国が決めた日程で1週間ほど全国一斉に実施される。受験科目は、3つの系統で異なり、

また選択科目によっても異なり、非常に複雑なシステムになっている。

3. 現状の問題点と改革の背景

バカロレアの合格率は前述したように非常に高いのであるが、その後大学への進学者がどうなったかという点を見ると、最初に選択した学部で学士号を取得できたのは39%に過ぎず、61%は最初に選んだ学部や専攻を途中でやめたり、他に移ったりしていることが分かる。つまり、現行のバカロレアは大学進学資格試験であるにも関わらず、その内容が進路指導の役目を効果的に果たしていないと考えられる。例えば、現在、科学系は優秀な学生のコースと一般に理解されているため、将来自分が何を勉強したいのかよく考えずに科学系を選び、その後大学で理系の学部に入ってから半年か1年ぐらい勉強しているうちに、選んだ学部の勉強は自分が本当にしたいことではないと感じ始め、日本研究に移ってくるというようなケースが、筆者の勤務校でも実際にある。

また、現行のバカロレアは、皆が同じ時期に同じ内容の試験を一発勝負で受けるシステムなので、公平性はある程度確保されるが、数年に渡る受験者の努力に十分報いるものとは言えない。高校生の持続的な学びを考慮し、彼らが自分自身の進路を考え築いていくのをサポートできる制度が望ましい。

*パリ大学（旧パリ・ディドロ大学）准教授

¹技術バカロレア、職業バカロレアもあるが、本稿では省略する。

4. 改定による大きな変化

2021年バカロレア改定では、以上の様な現状の問題点を改善するために、いくつかの大きな変更がなされる。まず、現行の科学、経済・社会、文学の3系統が廃止される。その代わり高校2年時に、必須科目（その中には二つの外国語が含まれる）以外に、自分の考える進路によって3つの専攻科目を選択しなければならない。そしてそれを3年時に2つに絞る。専攻科目として選べるのは、7つの芸術分野を含む19の科目で、現行の3系統の枠を超えた多様な組み合わせが可能であり、それによって進路の選択肢が大幅に増える。

二つ目は、内申点・平常点評価の大幅導入（40%）である。この内訳は、高校2年時、3年時の授業の成績評価が10%で、30%は高校内で行われる共通試験の評価である。これにより、現行のバカロレアのように国が決めた日程で一斉に行う試験科目が少なくなり、その評価は60%に留まる。後者は、高校2年時のフランス語試験（筆記と口頭）、高校3年時の春に専攻2科目の筆記試験、6月の哲学の筆記試験と20分間の大きな口頭試問のみになる。この口頭試問では、受験者は自分の選んだ選択科目に関係させて、自分が考える自分の進路について説明し、審査員の質問に答えなければならないということである。

5. フランスの外国語教育政策と新指導要綱

教育省のホームページに、フランスの中等教育における外国語教育の理念、目的、優先事項などが簡潔にまとめられている。

「どの生徒も中等教育終了時には二つの外国語でコミュニケーションができるようになっていなければならない。その目標達成のために、言語教育はヨーロッパの共通の展望に従う。生徒は小1の時から一つの外国語に親しみ、小学校から高校までどのレベルでも口頭の実践が優先される。フ

ランスの生徒達の外国語能力向上は優先事項である。言語学習は、市民性の確立、人格発展、世界へ視野を広げることに於いて、重要な位置を占める。また、フランス国内や外国での若者の就業可能性を高める（筆者訳）。

ここで、「言語教育はヨーロッパ共通の展望に従う」と述べられているのは、「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）の理念に則り言語教育を行う」という意味である。教材としてオーセンティックな資料（レリア）の使用の推奨、文化的テーマからの切り口で語学学習を行うアプローチ、行動中心アプローチ、口頭でのコミュニケーション優先は、前指導要綱から引き継がれている。新指導要綱では、「自分自身の進路を考え築いていく」ということが重要視されているということは前述したが、外国語教育の分野でも、自分自身の進路・目的などをきちんと説明することができるようになることが求められる。CEFRの基本理念の一つである行動中心の考え方では、学習者を社会の中で自分自身の課題を遂行しながら生活する者として捉えているのであるが、それを高校生の場合に当てはめると上述したことが現実の課題の一つになるということであろう。

それ以外に、ICTを用いた書くインターアクションの活動、および、mediationと呼ばれる仲介活動が、新指導要綱に加わった。前者は、メール、ライン、SNSなどの時代のニーズに合わせた能力を養うための活動、後者は、翻訳や通訳に代表されるような複言語・複文化能力を育てるための活動である。この二つは、2018年に作成されたCEFR Companion volume with new descriptors（CEFRの補完版）で記述されている能力である。

文化的テーマからの切り口で語学学習を行うアプローチは、前指導要綱と変わりはないが、学ばなければならない文化項目の数が増える。今まで、高校3年時には4つの文化項目が指定されていたが、2021年バカロレア改定後は、以下の8つ

のテーマのうち6つを授業で取り上げなければならないことになる。(1)アイデンティティーと交流 (2)私的領域と公的領域 (3)美術と権力 (4)市民性と虚構の世界 (5)フィクションと現実 (6)科学のイノベーションと責任 (7)多様性とインクルージョン (8)領土と記憶

文化的テーマからの切り口で語学学習を行うというアプローチで待たれているのは、これらの抽象的な概念そのものを掘り下げて学ぶことではなく、学習者にとって身近な問題提起となるようなレリア教材(音声、映像、テキストなど)を用いて考えさせながら外国語を学ぶことである。例えば、多様性とインクルージョンの項目なら、ハンディキャップを背負った同級生の普通クラスへのインクルージョンについて考えさせる、というようなことが可能である。そして、複言語・複文化能力を育てるという視点からは、同じ問題提起を、複言語で扱うということが考えられる。つまり、例えば日本語のクラスとスペイン語のクラスの両方で問題提起を共有し、それぞれの言語で学ぶことが考えられる。(フランス中等教育機関日本語教育研修会でのGIROUX Benjamin氏の講演による)。

フランスの外国語教育政策では、中等教育終了時には、どの生徒も二つの外国語でコミュニケーションができることが目標となっていることは既に述べたが、三つ目の外国語を選択し勉強する生徒もいる。第1外国語というのは小学校1年の時から勉強する言語、第2外国語というのは中学校1年で勉強を始める言語、第3外国語というのは高校1年から勉強を始める言語のことを言う。

現行のバカロレアでは、科学系、経済・社会系、文学系によって、筆記試験だけなのか、口頭試験も受けるのかという点が多少異なるが、大まかに言えば、第1外国語、第2外国語は、高校3年時の6月に筆記試験を受けなければならない。一方、第3外国語で選んだ言語は必須科目ではないので、口頭試験だけでよい。必須科目でない試験も受

けるメリットが何かと言うと、20点満点で合格点10点以上を取ると、その点がバカロレアの合計点にボーナス点として加算されるということである。つまり、11点を取れば1点、18点を取れば8点加算されることになり、第3外国語の試験で良い点を取れば、全体点をあげることができる可能性があるわけである。

それが、2021年バカロレア改定後には大きく変化する。第1外国語も第2外国語も第3外国語も、国の行う一斉試験科目ではなくなる。第3外国語に至っては、高校2、3年時の授業の成績がそのまま内申点になり、受験に備えて勉強するということが全くなくなるわけである。第1外国語と第2外国語の場合は、国の行う一斉試験ではなく、自分の学校で授業内に受ける共通試験を受け、その点が平常点になる。それは計3回で、高2の2学期に1時間の筆記試験、3学期に1時間半の筆記試験、高3の3学期に2時間の筆記試験と10分の口頭試験が予定されている。それぞれの学校で授業内に行うと言っても、担当教師が試験問題を作成するわけではない。外部の教師達が作成した試験問題がデータ・バンクに保存され、その中からその学校の教師が校長とともに試験問題を選ぶという手順になる。

また、バカロレア改定後は、上述した専攻科目の一つとして外国語の言語・文化という科目を選択することもできるようになる。その場合は、バカロレア最終試験として、筆記試験(3時間半から4時間)と口頭試験(20分から30分)の試験を受けることになる。

指導要綱には、外国語の到達目標としてのレベルがCEFRの六段階レベル(A1からC2)を用いて示されているが、新指導要綱では、第1外国語の場合は、高1終了時にB1-B2、高2終了時にB1-B2、卒業時にB2、第2外国語の場合は、高1終了時にA2-B1、高2の終了時にB1で、卒業時にB1、第3外国語の場合は、高1終了時にA1-A2、高2終了時にA2-B1、高校卒業時にB1となる。これを

現指導要綱の外国語の到達目標と比べてみると、第1外国語では、高1終了時にB1であったものが少し高く設定されることになる。第2外国語の場合は、高1終了時にA2であったものがA2-B1となり、高2の終了時にA2-B1であったものがB1のみになり、卒業時の到達目標は変わらないとは言え、授業の進度を上げることが必要になる。一番変化があるのが、第3外国語の場合で、高1終了時にA1であったものがA1-A2となり、高2終了時にA1-A2であったものがA2-B1となり、高校卒業時にA2であったものがB1となる。第2外国語と第3外国語の卒業時到達目標が同じになってしまうわけである。

6. 日本語教育への影響

日本語の場合、高校に入ってから始める第3外国語として履修する生徒の数が一番多い。バカロレア改定により、第3外国語はテスト科目ではなくなり、高2と高3の授業の成績のみが平常点としてカウントされることになり、現行のバカロレアに存在するボーナス点を獲得できるという第3外国語口頭試験の利点もなくなってしまうことは既に見た。また、外国語のレベルの到達目標が全体的に高くなり、特に第3外国語の高校卒業時の到達目標がB1と設定され、第2外国語と同じレベルに設定されたことも上述した通りである。

これらの変化が、フランスの中等教育の日本語の授業に色々な影響を与えることは想像に難くない。フランスの中等教育で日本語を教えている先生達が、どの様にこの改定の影響を受け、今現在どの様な点を懸念しているか、具体的に知るために、「2019年フランス中等教育機関日本語教育研修会事前アンケート結果報告書」（国際交流基金）を参照した。この研修会は、1年に1回11月に、国際交流基金主催、フランス日本語教師会協力で開かれており、フランスであちこちの中学校、高等学校で教えている先生達の多くが出席し、直接

話し合いができる数少ない機会となっている。その機会には、毎年、国民教育省日本語準視学官またはその代理が講演をし、参加者と質疑応答を行うことになっている。その準備として、準視学官に聞きたいこと、説明してほしいことについて、事前アンケートが行われるのである。

7. 日本語教師の懸念点

アンケートの回答を見てまず分かるのは、第3外国語で日本語を教えている教師がほとんどで、現在自分が行っている授業を変えていかなければならないと感じているということである。そして、それをどのようにしたら良いかという点に疑問を感じ、他の人の意見も聞きたいと考えている。何を変えなければいけないと感じているのかというと、大きく分けて、内容、スピード、それから評価である。

内容を変える必要性については、色々な要素が関係している。現行バカロレアでは第3外国語は口頭試験のみなので、授業でも必然的に口頭試験の準備という側面に力が入っている。これがただ1回の口頭試験をめざすということではなくなると、授業のやり方はどのように変えたらいいのだろうか。また、新指導要綱に、ICTを用いた書くインターアクション活動が加わったということは上述したが、それに則り、外国語の授業にもiPadの導入を決めたり、デジタル機器、デジタル教材の使用を義務付けたりする機関が出てきた。生徒の興味を引きそうなデジタル教材などを急遽リスト・アップして、それを使用した授業を作っていかなければならないということで他の教師と話し合いたいという人もいる。到達目標レベルが上がったことにより、上達速度を速めるための内容見直しが必要という点では、内容とスピードは切り離せない関係にある。

文化項目が8つ提出され、今まで4つで良かった項目を授業で6つ取り上げなければならなく

なったことから、授業のスピード・アップが余儀なくされる。さらに、文化項目に関して、レアリアを使用して授業を組み立てなければならない点で、第3外国語のレベルで適当なレアリアを探し出す難しさについての言及もある。また、卒業時の到達目標が上がったということは、今までよりも高度な文法項目も教えなければならないということなので、一方では文化項目に沿った授業を進めながら、一方では文法項目のレベルアップも同時にやらなければいけないことに対する不安の言及もある。

また、第3外国語の口頭試験がなくなること、今まで授業で口頭能力の上達に力を入れ、評価も、読み書きよりも口頭表現能力の方を重く評価してきた教師は、これから何をどの様に評価すればよいのかという疑問を感じている。授業の成績のみがカウントされるということになれば、主観的、不公平な評価にならないようにするために、共通評価基準なども必要になるだろう。

その他、バカロレア改定の負の効果が既に見られるとの言及もある。2021年度のバカロレア試験が新しいシステムで行われるということは周知のことなので、今現在高校1年、高校2年に在籍している者は、自分達が受けるバカロレアが新システムで行われるということを承知している。そのため、高1、高2の第3外国語の日本語の履修者が減ったというのである。第3外国語の卒業時の達成目標が第2外国語のそれと同じになってしまったことにより、習得に時間がかかる日本語より、スペイン語やイタリア語などのようにフランス語母国語話者が習得しやすい言語の方に履修者が流れた、ということらしい。

また、第3外国語の日本語のクラスにモチベーションの低下が見られるので、生徒のモチベーションを上げるにはどの様にすればよいのかという疑問もいくつか見られた。第3外国語の口頭試験がバカロレアのテスト科目ではなくなり、ボーナス点を取れるメリットもなくなったことが影響し

ているのであろう。

8. 最後に

フランス政府は、CEFR (2001) やCEFR Companion volume with new descriptors (2018) のヨーロッパ・グローバルな基本理念に基づき、フランスの外国語教育政策、新指導要綱を作成しており、バカロレア改定もその延長線上にある。示された考え方は明快で、理解しやすい。複言語、複文化主義のアプローチの中で、日本語も他の言語と同様に1つの外国語として扱われており、その平等な配置は一見何の問題もない様に見える。しかし、すべての外国語は、同じメソッドで、同じ期間で、同じ速さで学べるわけではない。また、学習者の母国語に近い外国語、遠い外国語の習得が同じように行われるはずはなく、後者により多くの時間がかかるのは当然である。このバカロレア改定には、その視点が欠けているような気がする。第2外国語と第3外国語の卒業時達成目標レベルを同じにしたりするのは、暗に、日本語などフランス語から遠い言語で、習得に時間がかかる外国語の学習をあきらめるように促しているのではないかと勘繰ることもできる。また、口頭能力を高めることが優先というのが政府の外国語教育政策の指針であるが、日本語は書記体系が複雑であるので漢字の学習は避けることができないし、語彙も和語だけではなく漢語もある程度習得しないとレベルアップできない。この習得にかかる時間も考慮しなければならず、その分、書記体系がアルファベットである言語よりも、習得に年数がかかるのは明らかである。

この様な点が考慮されていないバカロレア改定は色々な問題を含んでいる。ローカルな実践に携わる現場の日本語教師の声を具体的に聞くと、すべての外国語学習をグローバルな視点で一律に扱うことには、色々無理があることが分かった。2021年のバカロレア改定までにはまだ時間がある

と思われるので、準視学官を通して、現場教師の意見・懸念が具体的に教育省に伝えられ、話し合い、議論、交渉が持たれ、結果として、本稿で概観した問題が解決の方向に向かうことを期待する。

参考文献

安藤英梨香 (2018) 「フランス高等教育進学制度の改革」『外国の立法』No.275-2 http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11093476_po_02750204.pdf?contentNo=1

東伴子 (2018) 「中等教育・高等教育・社会を結ぶ評価とはーバカロレア日本語試験からの考察ー」ヨーロッパ日本語教育23, pp. 179-191
<https://eaje.eu/pdfdownload/pdfdownload.php?index=191-203&filename=chutokyoiku-higashi.pdf&p=icjle2018>

細尾萌子 (2018) 「フランスの高校改革と大学入試改革ー高校の内申点重視の功罪ー」日本教育学会 近畿地区研究集会

https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/231903/1/jera_kinki_kenkyu2018_2.pdf

GIROUX Benjamin (2019) « La réforme du baccalauréat dans les textes et son application à l'enseignement du japonais » フランス中等教育機関日本語教育研修会での講演

国際交流基金 (2019) 「フランス中等教育機関日本語教育研修会、事前アンケート結果」研修会配布資料

Council of Europe (2001) « Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment », Cambridge University Press

Council of Europe (2018) « CEFR Companion volume with new descriptors »

<https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>

参考URL

フランス国民教育省 <https://www.education.gouv.fr/cid126438/un-nouveau-baccalaureat-2021.html> (2020年1月10日閲覧)

Eduscol

<https://eduscol.education.fr/cid143130/enseignement-scientifique-bac-2021.html#lien2> (2020年1月10日閲覧)